

地元自治体・都民との協働のあり方 —井の頭公園アートマーケットの成果と継承—

宮崎 猛¹・柳 久美²

東京都建設局 西部公園緑地事務所 管理課 (〒180-0005 東京都武蔵野市御殿山1-17-59)

平成29年に開園100周年を迎えた都立井の頭恩賜公園では、手づくりアート&大道芸を年間登録制で出展できる全国初の試み「井の頭公園アートマーケット」が12年開催されてきた。その実施主体である「井の頭恩賜公園100年実行委員会」が解散した後、「公園を核とした賑わい創出」事業を継承すべく東京都と地元自治体、都（市）民とでアートマーケット運営委員会を結成し、新しい地域連携・協働のあり方を追求した。さらに静かな公園散策を望まれる来園者や公園関係者にも配慮し、来園者の声を聴取する取組を行ったうえで、新しいアートマーケット制度構築を図った。

キーワード 井の頭恩賜公園、手づくりアート&大道芸、アートマーケット、協働、継承

1. はじめに

東京駅からJR中央線で25分の吉祥寺は多くの商業ビルとトレンドカジュアルやコスメ雑貨などの店が集まり、「おしゃれ」なイメージで毎年、住みたい街上位に選ばれている。その吉祥寺駅から歩いて5分、七井橋通りの雑踏を抜けると、日本初の郊外公園として開園した都立井の頭恩賜公園（以下、「井の頭公園」）がある。初めて江戸にひかれた神田上水、今は神田川の源流である井の頭池の水面にせり出すサクラの独特な美しさはたとえようもなく、初夏の新緑、秋の紅葉と井の頭公園は四季折々に訪れる人々の心を癒やしている。



図1 開園100年を迎えた井の頭恩賜公園

2. 井の頭公園に“露店”現れる

1990年代後半、都心の駅前や広場でストリートミュージシャンが流行した頃、井の頭公園にも楽器演奏やジャグリング等で投げ銭をとる大道芸とともにポストカードやアクセサリ等の手づくり品を園地に並べて販売する者たちが出現した。

彼らは井の頭公園の“露店”と呼ばれ、ロコミ（当時SNSはない）で広がり、好天の週末には100人を数えることもあった。いずれも都立公園条例で禁止されている無許可営業行為にあたるため、公園管理者である東京都西部公園緑地事務所では発見次第、注意して帰ってもらっていた。

“露店”の者たちは、公園職員の注意には従うものの「売らなくてもいい、作品を見てもらいたいんだ」と主張する。手づくり品を通じて来園者との会話を楽しんでいるようにも見える。

静かに公園散策したい方々から「人だかりは通行の支障」「騒音」と苦情が寄せられる一方で、彼らを楽しみに訪れる来園者から「認めてやればいいじゃないか」と公園職員が抗議を受ける場面も起きるようになった。彼らは何度注意されても井の頭公園にやってくる。規制・排除という行政の基準だけでは“露店”を止めることはできなくなっていた。

3. 井の頭恩賜公園100年実行委員会

吉祥寺周辺でも郊外の都市化が進み武蔵野の面影が失われつつある中で、豊かな水と緑が残る井の頭公園は貴重な都会のオアシスである。しかし、いつのまにか湧水は減少し、水は濁って外来種ばかりの池になっていた。水質浄化と水辺の再生は、井の頭公園を所管する東京都西部公園緑地事務所の積年の課題であった。

平成 18 年 7 月、井の頭池の復活をテーマに画期的な試みが始まった。東京都西部公園緑地事務所が事務局となり武蔵野市、三鷹市、地元商工会やライオンズクラブ等関係団体で井の頭恩賜公園 100 年実行委員会（以下、「100 年実行委員会」）が立ち上がり、平成 29 年の開園 100 周年を目指して、地域連携・都民協働による様々な事業を展開していくことになった。

100 年実行委員会事業の二つの柱は、かいぼりを中心に井の頭池の再生や生態系の回復に取り組む「水と緑部会」と賑わい創出のイベントを手がける「賑わい部会」であり、「賑わい部会」のメイン事業が、手づくりアート&パフォーマンスに公園を提供する「井の頭公園アートマーケット」である。



図2 アートマーケットロゴマーク

4. 井の頭公園アートマーケット

平成 18 年 8 月、公園職員は発想を転換して“露店”取り締まりから一転、新たな制度づくりに取り組んだ。同年 10 月から毎週末、“露店”の者たちと来園者との交流に着目しながらヒアリング調査を重ねていった。

彼らは、吉祥寺と井の頭公園への愛着とこだわりもっていた。また、「テキ屋」や仕切人はいなかったことが制度づくりに転換できた重要なキーでもある。

作品は手づくりのアクセサリーやポストカードが多く、中には驚くほど精巧かつ繊細な作品や美術的に優れた絵画等もある。モノづくりの面白さを熱心に語る彼らに来園者は目を輝かせて聞き入り、会話を楽しんでいる。大勢の子どもを喜ばせたり、熱心なファンに支えられた上級者のパフォーマーも誕生していた。井の頭公園に集う人と人同士のふれあい交流に触れ、公園職員には応援する気持ちが芽生えていた。

アートマーケットの仕組みは、100 年実行委員会が事業主催者となり、表現者（アートキャスト）の募集、登録、運営を行い、東京都から占用許可を受けて実施する。100 年実行委員会は、運営経費として年 1 万 2 千円の登録料を徴収する。年間登録制としたため、アートキャストは一度登録すれば、土日祝（概ね 110 日）、何度でも出展できる。条例の禁止行為（販売・投げ銭）を伴うため、本庁との調整に時間を要したが、100 年実行委員会事業として時限的に実施することで了承を得た。

平成 18 年 12 月、不適正な出店者を排除するため、1 か月の出展禁止期間を経て、平成 19 年 1 月、井の頭公園アートマーケットがスタートした。

5. アートマーケットの理念

アートマーケットの理念は、公園がアート表現者に一定のエリアを提供し、表現者と来園者とはアートを介してふれあい交流を楽しむ。そして、そのふれあい交流が賑わい創出の原点となり公園の活性化につながるというものである。

表現者と来園者と公園との協働でおりなすアート表現の場であることから事業名は複数形にし、語呂がよいので「恩賜」はつけずに“井の頭公園アートマーケット”と名づけた。

東京都は事務局を担い、アートキャストと一緒にルール見直しを図ることにし、定期的にアートキャストミーティングを設けた。公園管理者の論理も踏まえてアートキャストの主体性を大事に育てていくことで、やがてはアートキャスト自ら管理運営に参画するようになることを目指したのである。

井の頭公園アートマーケットは、都市公園の新しい利活用を提唱する社会実験でもあった。

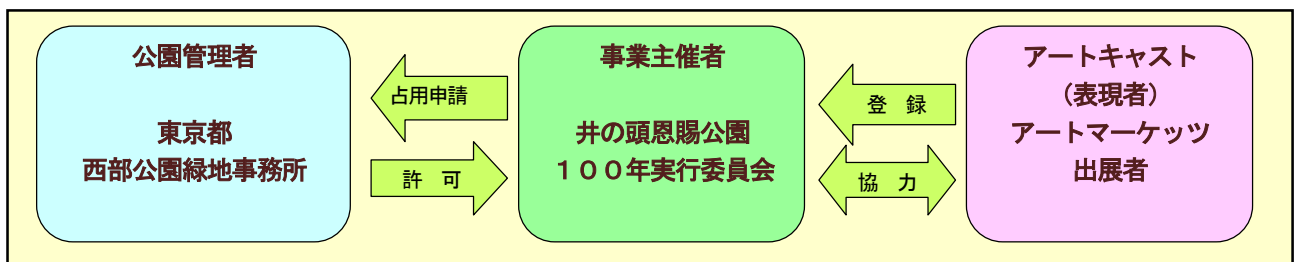


図3 アートマーケット運営の仕組み

6. アートマーケットの成果

(1) 公園管理の適正化と活性化、そして協働を学ぶ

アートマーケットが始まると、無秩序だった“露店”の集団は整然と「ART*MR T出展登録証」を掲げて一定のルールを守るアートキャストに転化した。公園管理の適正化と活性化を同時に図れたことが大きな成果といえる。

アートマーケットの知名度が上がり、週末の井の頭公園の風物詩として定着すると多くの来園者が訪れ、心温まるふれあい&交流が生まれ、賑わい創出とともに公園が活性化されている。アートキャストがいることで迷子や事故の連絡、遺失物の案内、無断出店や違法駐輪、ゴミの投棄等を防ぐ効果もあった。

また、井の頭公園が手づくり文化の発信基地になり、アートマーケットを登竜門にしてテレビに出演するようになったキャスト、二科展の特選賞受賞者や井の頭公園の公式キャラクター「ひやくさいくん&ひゃっこちゃん」等を描いたイラストレーターなど優れた芸術家もキャスト登録している。

登録者数は、年々増えてピークには400人を超え、遠方、他府県からの登録者もいる。

東京都西部公園緑地事務所職員は、無許可営業行為の規制という役人的な発想から視野を広げ、事務局として懸命に制度づくりを行った。100年実行委員会、アートキャストとともに協働を学びながら、相乗効果による賑わいの創出が新たな文化、価値の創造につながることを体験することができた。



図4 ふれあいパフォーマンス

(2) 「井の頭恩賜公園100歳記念ウィーク」と「井の頭100祭」

井の頭公園は、平成29年5月に開園100周年を迎えた。5月1日から7日まで東京都西部公園緑地事務所は100年実行委員会と共催で「井の頭恩賜公園100歳記念ウィーク」を開催した。

小池都知事をひやくさいくんがお出迎えして始まり、地元武蔵野市、三鷹市、ジブリ美術館、映画会社PARKS、近隣大学等と地域連携により実施した1週間

のイベントは36万人の来園者を迎えて大成功した。アートキャストも企画から参画し、パンフづくり、ワークショップやステージ演奏等で大いに存在感を示している。

一方、毎年秋に東京都西部公園緑地事務所とアートキャスト有志とで「井の頭100祭-Countdown to2017-」を継続開催し、一昨年で8回目を数えた。アートキャストは無報酬で年20回を超えるミーティングに参画し、企画・立案からポスターづくりまで地元有志、近隣大学生のボランティア等と連絡調整を行うなど協力し、「井の頭100祭」は手づくり感あふれるイベントとして開催されてきた。

一昨年、フィナーレとなる「井の頭100祭2017」は雨天順延を乗り越えて、4万人の来園者とともに紅葉真っ盛りの井の頭公園で幕を閉じた。「100歳記念ウィーク」と「井の頭100祭」では、協働のパートナーとして成長してきたアートキャストの姿をみる事ができた。



図5 アートキャストがデザインした井の頭公園公式キャラクター ひやくさいくん&ひゃっこちゃん

7. 井の頭恩賜公園100年実行委員会の終焉

(1) 100年実行委員会の解散とアートマーケット終了

100年実行委員会は、平成29年5月の開園100周年記念行事と秋の「井の頭100祭2017」、「かいぼり2017」の終了後、その目的を達成し、その使命を終える。

精算業務等のため平成30年度まで存続することになり、アートマーケットも暫定的に1年延長されたが、100年実行委員会の解散に伴い、井の頭公園アートマーケットは、事業主催者を失うことになっていた。

(2) アートマーケット存続を求める声、声、声

平成27年度、アートキャスト有志による「アートマーケットをつなぐ会（アート部門）」そして「アートマーケット存続の会（パフォーマンス部門）」結成とともに、切なるアートマーケット存続の要望が事務局に寄せられた。また、来園者の「続けてほしい」という

メッセージに加えて新規登録希望の問い合わせも数多く、100年実行委員会構成団体からも「継続すべきではないか」と応援の声が届けられ、複数の議員要望も聞こえてきた。

東京都西部公園緑地事務所（アートマーケット事務局）は、「アートキャストとの協働で10年続いたアートマーケットであるから、行政の論理で一方的に終了するのではなく、アートキャストとともに考えて存続の可能性をみつけよう」と覚悟を決めた。

しかしながら、本庁との約束（100年実行委員会解散とともに終了）もある中で、存続できるものなのか、どのようにして存続したらよいのか、ひと言では言い表せない苦悩の日々が続いた。アートキャストミーティング、「つなぐ会」や「存続の会」でキャスト有志と本音の話し合いを重ねていく。

季節限定で開催するイベント（案）も提案してみたが、アートキャストの強い意思は、“年間登録制”によるアートマーケットの存続であった。

(3) 再び本庁との調整、地元両市と相談

“年間登録制”で存続させるためには、100年実行委員会に代わってキャスト登録し、占用申請する「事業主催者」が必要である。いくつかの選択肢の中で①行政同士で新たな新機構をつくる。②両市の監理団体を主催事業とする。③キャスト自らNPO等をつくり実施主体となる案が可能性として残る。

平成29年夏、改めて本庁との調整に臨む。条例の禁止行為を伴うためハードルは高かったが、「100年実行委員会のパートナーである地元両市がアートマーケット存続を希望すること」「アートマーケットの存続が地元両市のメリットになる」等の条件を出しながら存続の方向に理解を示してくれた。

平成29年秋、武蔵野市、三鷹市とともにアートマーケット存続の方策について協議を始める。両市から「アートマーケットは吉祥寺、井の頭公園の貴重な資源」と11年の開催実績を讃える評価をいただく。事務局が考えていた以上にアートマーケットの存在意義、価値を認めてくれていたことに感動を覚えた。

両市と行政の枠組みを超えて真摯に検討を重ねた。②の監理団体は運営実態として困難、③は時期尚早で無理、①の行政同士の新機構づくりを具体化することになった。100年実行委員会で顔を合わせていたとはいえ、アートマーケット新機構づくりは、両市職員に新たな負担をかける。それだけに「一緒に街の新しい文化を発信していきましょう」と前向きな回答をいただいた時は本当に嬉しかった。両市と同じ価値観、方向性を共有することができた。

8. 井の頭公園アートマーケット運営委員会

平成29年12月、東京都西部公園緑地事務所、武蔵野市、三鷹市とで「井の頭公園アートマーケット運営委員会」設立の構想をまとめた。井の頭公園をベースに将来的には地元両市のイベントやワークショップ等への参加を期待するものとして、両市と協働で運営する新機構とする。

同月、本庁の了承も得ることができ、足かけ2年、アートマーケットの存続が成就することになった。

両市が協力するときの課題として、「顔も知らないアートキャストが個々バラバラでは市側で管理、協力はできない。キャストは、まとまることはできないか」と提案を受けた。

平成30年3月、アートキャストに「自主管理グループ」づくりを提言した。すると、次のミーティングにアートキャスト有志から「アートキャスト自治会構想案」が提出され、同年4月のキャストミーティングで満場一致で了承された。

平成30年度登録者によって、自治会から連絡協議会へと名称を変え、役員候補者が決まる。平成31年4月の新アートマーケットのスタートを目指して準備が進められていった。

9. まさかのアートマーケット存続にブレーキ

アートマーケット開始当初からあった否定的なご意見をお持ちの方々から、100年実行委員会解散後もアートマーケットが継続することを知って、改めて「反対」の強いご意見が寄せられた。

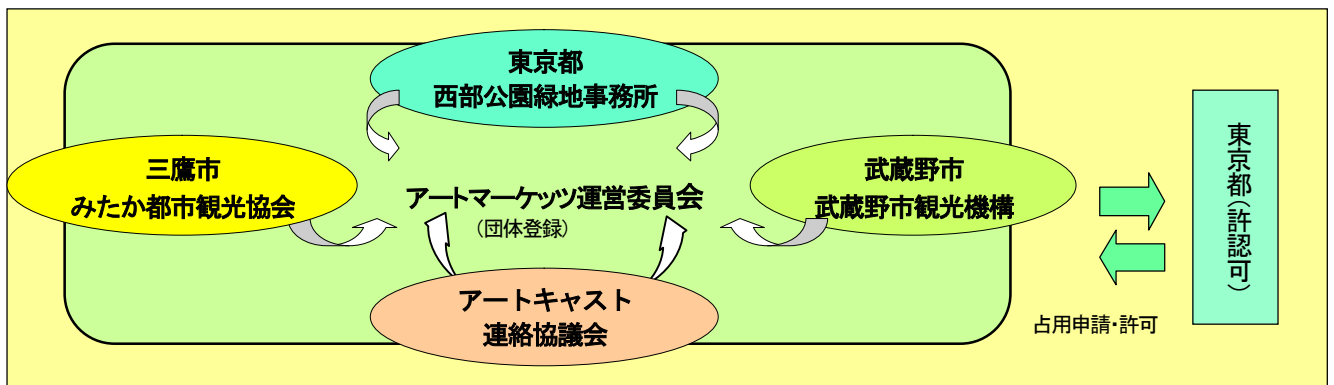


図6 アートマーケット運営委員会イメージ

井の頭公園は広場が狭小のため、アートマーケットが開催されることで「遊具が利用しにくい」「親子で自由に遊べない」「静かな公園散策ができなくなった」というご意見はあった。また、近隣住民から「パフォーマンスの音がうるさい」とか「ルールが守られてない」といった苦情も寄せられていた。

東京都西部公園緑地事務所は真摯に対応し、同時にアートマーケット制度と管理体制を検証したうえでスタートすることとした。

平成31年3月10日、再開の目途がないまま、100年実行委員会の下でのアートマーケットは終了、12年の幕を閉じた。

10. アートマーケット開催に向けて

(1) イベント・アートマーケット

東京都西部公園緑地事務所は、令和元年5月3日、4日、5日と開園記念イベントとして、「イベント・アートマーケット」を開催し、多くの来園者からアートマーケットに対する意識調査（アンケート）を行った。

3日間でアンケートは445枚、出展協力の平成30年度登録キャストは延べ159名、イベントは大成功であった。

アンケート結果は、多くの方々からアートマーケットへの高い評価と期待を確認することができた。

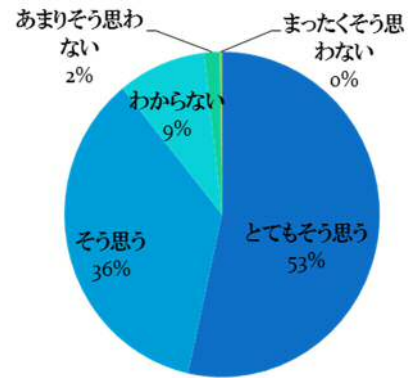


図7 ひゃくさいくんも登場

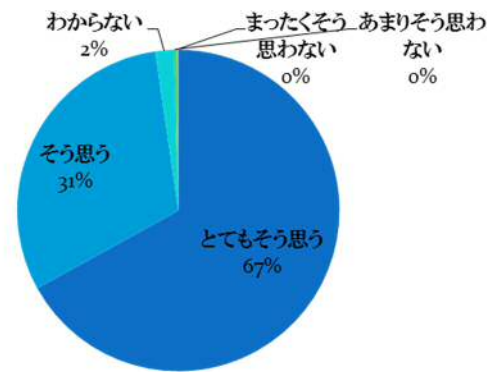


図8 多くの来園者がアンケートに協力

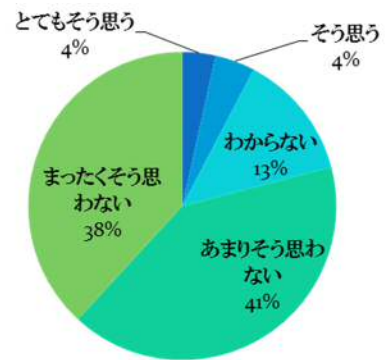
手づくりアート作品に魅力がある



公園の雰囲気よくなる(活気ができる)



静かな公園散策の妨げ



アートマーケットの開催頻度(毎週末・祝日)

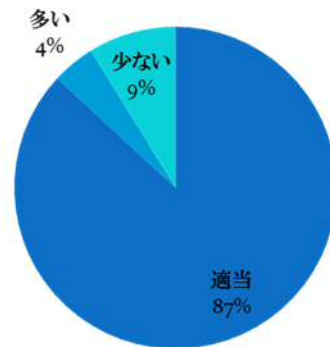


図9 アンケート結果(抜粋)

(2) アートキャスト連絡協議会準備会

アートキャスト平成30年度登録者は「アートキャスト連絡協議会準備会」を継続開催し、新しいアートマーケットに向けて、出展ルール見直し等の協議を重ねてきている。東京都西部公園緑地事務所から再開の声が聞こえたら、いつでも連絡協議会が動き出せるよう準備を進めているという。その健気な姿勢には、改めて応援したい気持ちを強くする。



図10 温かなふれあい交流

11. おわりに

アートマーケットは「心の交差点」、アートを通じて「心と心のキャッチボールが楽しい」というアートキャストの笑顔が素晴らしい。

アートマーケット成功の鍵は、温かく見守ってくださった多くの来園者、モノづくりと人との交流を楽しむアートキャストのひたむきな姿勢、そして公園管理の限界を協働で乗り越え、新しい文化を生み出そうとした公園職員の情熱にある。



図11 心と心のキャッチボール

アートマーケットの継承は、東京都、武蔵野市、三鷹市と監理団体、そしてアートキャストとともに新しい地域連携、協働のあり方を追求したものである。

協働事業では、行政の通常業務だけでは感じるこ

のできない感性や知見を得ることもでき、自治体職員として一步高い次元に成長できたように思う。お互いを尊重し、立場の違いを乗り越えて協力、補完し合うことで信頼関係が醸成され、プラスαの事業効果を得ることができた。

新井の頭公園アートマーケットは、東京都西部公園緑地事務所が提唱し、アートマーケット運営委員会が運営主体となる新しい協働事業として令和元年7月の事業開始を目指す。

NEWアートマーケットは、両市エリアに根ざした手づくり文化を発信する協働のツールに進化を遂げ、吉祥寺と三鷹の街のつながりを再発見し、新たな魅力向上を図るユニークな事業として発展していくものと確信している。